

2. パネルディスカッション

農林中金総合研究所 天谷知子

東京海上ホールディングス 西原亮二

早稲田大学 野村俊一

(モデレータ) グッゲンハイムパートナーズ 酒井重人

酒井 このパネルディスカッションの演題は天谷様の講演と同じく、「気候変動リスクへのアプローチ」です。

本日のパネリストをご紹介させていただきます。まず、特別講演をいただいた天谷知子様、東京海上ホールディングスのリスク管理部部長の西原亮二様、そして早稲田大学商学大学院准教授の野村俊一先生です。西原様はグローバルリスク管理のグループリーダーとして自然災害リスクを含め、国内外のリスクを包括的に分析・管理されています。野村先生はJARIP 研究普及委員会、研修会・研究会担当理事で、昨年はJARIP 学会賞をご受賞されています。モデレータは、グッゲンハイムパートナーズの酒井重人が務めさせていただきます。JARIP では現在フォーラム担当理事です。

天谷様からご講演を頂いておりますが、まずは私の方から、気候変動リスクに関する主要な論点を、IPCC の第6次統合報告書 (AR6) を踏まえ、改めて要約的に共有させていただきたく存じます。

ご承知のとおり、最直近の報告書が第6次統合報告書です。1990年より6回報告がされましたが、人間活動が温暖化に及ぼす影響について、第1回目の「気温上昇を生じさせるだろう」から、徐々に評価が変わり、「可能性が高い」「非常に高い」「極めて高い」、さらに今回では「疑う余地がない」という評価になっていることが示されています。これらは科学者たちの知見に基づいており、報告書に加わった執筆陣数は、65カ国234名、日本から10名、引用文献が1万4,000以上とのことでした。

これらの研究者の分析では、「人間の影響による温暖化には疑う余地がない」、人為的な部分で気温上昇が起きている、という分析結果となっています。

西暦2000年頃から急激にCO₂の水準が上昇し、人間活動によって温室効果ガスが増加していることを明らかにしています。

「世界平均気温の上昇が続いている」点については、直近の2020年で産業革命期に比べ平均1.09℃の上昇ですが、陸域では平均1.59℃ (1.34から1.83℃) と大きく上昇しているとのことでした。

その結果、世界平均気温は、少なくとも過去2000年間にわたって、1970年以降の50年間では、他のどの50年間にも経験したことのない速度で上昇している、世界平均気温の上昇速度は過去数千年前例がないことが指摘されています。

第6次統合報告書のワーキンググループ1 (WG1) のその他の分析の要約ですが、

「極端な高温はほとんどの陸域で頻度・強度が増大」

「海面水位、海水温、酸性度は急速に上昇」

「北極海の海水の縮小や氷河の後退は数千年来前例がない」

「海洋熱波の頻度が増加」「干ばつも増加」